

職員の皆さんへ

連日「熱中症」に関する報道もあり、熱帯夜が続いている現状もあることなどから、市民の皆様とりわけ高齢者世帯への健康管理・水分補給に関する注意喚起を徹底しなければならないと実感している毎日です。

さて7月5日ごろから福岡県朝倉市や大分県日田市などを襲った九州北部豪雨は、福岡・大分両県で43万人を超える住民に避難指示が出され、7月末時点で死者35人、行方不明6人という悲惨な状態をもたらし、被害総額も1400億円を超える甚大な災害となっています。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

今回の豪雨災害については、天気図などで明らかなように、同じ地点に次々と積乱雲が発生し長時間に集中的な降雨をもたらす「線上降水帯」が原因となつて、堤防決壊などの様々なインフラが機能不全となり今回のような被害拡大に及んでいるようです。

本市としては、7月6日未明に応援要請を福岡県知事から消防庁長官、長崎県知事を通して受け、7月25日までに7次に及ぶ緊急消防援助隊合計35人の消防本部職員を派遣いたしました。

被害からすでに3週間が過ぎ、徐々にその状況が明らかになっていますが、今回の災害現場では、大量の流木が橋桁などを直撃しそこに堆積することによって、さらに流れてくる濁流や追い討ちをかける流木がこれらを乗り越え護岸を破壊し人家や集落を飲み込んだ形となっています。

ある専門家の話によれば、森林の間伐が手付かずの状態になっていたことにより、山腹の土壌が洗い流されることが崩壊の原因になっていたと指摘しており、経済合理性によって後回しにされてきた林野事業そのものを見直されなければならないと警鐘を鳴らしています。

さらに筑後川水系において、本流は国が直接管轄し水位計や監視カメラなどが設置されている一方、福岡・大分両県が管理する支流など中小河川の多くではこうした監視体制が後手にまわっており、避難判断の遅れがみられたと分析されています。

こうしたことから得られる教訓として、私は次の二つが挙げられると思います。

一つには、中途半端な施策は「やらないこと」と同じ結果を招きかねないということ、二つ目は「問題の先送り」は将来に甚大なツケを残すということです。

一つ目の「中途半端な施策」というのは、「これくらいしておけばいいだろう」という安易な妥協です。当然、そのような実態が本市行政に存在するとは思いませんが、時折判断が難しいのは予算との兼ね合いだと思います。もちろん何事も完璧に仕上げたほうがいいのは当然のことです。でもそれを100%完遂するには膨大な予算がかかるので、どこかで線引きをしなければならない。そこで、

その線引きを判断する際、根拠の乏しい「勘だのみ」で行うか、何らかの実績や数値に基づくかで行うかに大きな違いが出てくると思います。その追求に妥協があってはならないということです。

二つ目の「問題の先送り」ですが、今回の災害の要因の一つは「山が荒れたこと」だと指摘されています。そもそも森林の水源涵養機能というのは主に広葉樹とそれらがもたらす落ち葉が腐葉土となり、多くの水を吸い込み蓄える機能です。しかし戦後、産業政策として針葉樹が多く植えられ、一方で安価な輸入材が流通しだすと、伐採費用が重くのしかかることで採算が取れない間伐作業が放置されてきたのが現在の林野現場です。結果的に山は荒れ続け、徐々に木々の根元は水に洗われむき出し状態となり、今回のような局地的豪雨により山腹が崩壊し、一気に流木が破壊のエネルギーとなって集落に襲い掛かるという結果を生み出しています。

つまり採算性の追求よりもむしろ公共的・公益的事業として応分の予算を投入し林業を支えていれば、今回のような災害は最小限に抑えることができたのではないかとの指摘もあります。かけがえのない人命の喪失や1400億円を越す被害額を見れば、林野事業に対するコスト感覚の見込み違いと問題の先送りが取り返しのつかない被害に結びついたとも言えるのではないのでしょうか。

もちろんこうした評論や分析が結果論であることは承知しています。加えて公共の予算を投入する際には、十分な協議と投資対効果について検証がされるはずであることも承知の上での話です。しかし日常の行政業務に向かう際、私たちの心のどこかに「そのうち解決するだろうから今は見送っておこう」という考えがないかどうかを振り返っていただきたいと思うのです。

翻って、「あの時、やっていた良かった」ということもあると思います。「どうせこの先やらなければならないのなら今のうちやっておこう」と積極的に業務に向かい成し遂げたことが、その時には評価を受けなくても、後々見事に効果が発揮され、全てがうまくいくことも経験したことがあるでしょう。

つまり行政業務のほとんどの分野は「少し先の未来を予測し対応に備える」ということではないのでしょうか。そうした意味で、「チャンスの種をまくこと」「可能性を伸ばすこと」「未然に災禍を防ぐこと」などの施策について、タイミングと度合いについて今一度、検証すべきではないかと考えさせられます。

本格的な夏はこれからです。このままの天候が続けば渇水などの水不足が懸念されますし、秋にかけての台風襲来も心配です。被災地の皆さんの一刻も早い復興をお祈りしながら、私たち自身もしかるべき備えを怠らず、市民の安心安全なくらしづくりにこれからも邁進しなければなりません。

いずれにしても、何を成し遂げるにも健康第一です。

どうか夏バテなどにならないように気を付けられ、この暑い夏をご家族とともに

にお元気で有意義にお過ごしいただければと心から願っています。
引きつづき職員皆様のご努力に期待します。

平成 29 年 8 月 1 日

平戸市長 黒田 成彦